

出会いと発見

—実践の扉 I

ゆりかごから墓場まで

—命を大切にする保育と

生活困窮者のための助葬事業

あしあと
社会福祉法人足跡の会

足跡の会を設立した経緯

神奈川県座間市に拠点を置く社会福祉法人足跡の会は、NPO法人として2009（平成21）年に設立、2015（平成27）年に社会福祉法人の認可を受けた。理事長の溝渕信一さん（53）は、設立の経緯を次のように語る。

「私は以前から葬祭事業（株式会社三

寶天壽企画）を営んでいますが、身寄りや引き取り手のない方の遺骨問題に心を痛めてきました。行き場を失った遺骨は『無縁遺骨』として市役所の倉庫に保管されることとなります。きょうだい仲が悪くて何十年も連絡が途絶えていたとか、借金で苦しめられた苦い経験から二度と会いたくないとか、理由はさまざまです。でもやはり、遺骨はきちんとお墓に埋葬し、供養されるべきです。さらに、年々その数が増えてきたので、葬儀社とは別にNPO法人を設立し、『遺骨を土に還そう運動』をすすめようと考えました」

法人の活動の柱としたのが、「遺骨問題」への対応と「青少年の健全育成」である。一見、相いれない内容にも思えるが、20年も前から青年会議所で子どもの健全育成を目的とした「10人11脚フットレース」等に関わってきた溝渕さんにとって、どちらも重要なテーマだった。そこで、人材不足に悩む青年会議所から子どもを対象としたイベント運営を引き継ぎ、2013（平成25）年からは「座間ママチャリフェスタ」を開催するなど、地域活性



合祀墓地である座間古霊廟は右の階段を降りると、下は骨つぼが並ぶ納骨堂になっている

化に貢献。2015年に社会福祉法人の認可を受けた後、2つの保育施設（綾瀬ゆめっこ保育園、座間ゆめっこ保育園）の運営も始めている。

生活困窮者のための助葬事業

「遺骨問題」を解決するために、足跡の会では、生活保護・生活困窮者を対象とした助葬事業に取り組んでいる。さらに、行旅死亡人・身元不明者などの扱いが難しい遺体の供養も請け負う。遺体安

神奈川県座間市にある社会福祉法人足跡の会は、持続可能な地域をつくるために、さまざまな団体と連携しながら地域の課題解決を図っている。保育事業から生活困窮者のための助葬・埋葬事業までを手がけ、スポーツの振興など地域に根ざした活動にも力を入れることで、「ゆりかごから墓場まで」の福祉を実践している。その活動について、理事長の溝淵信一さんに詳しいお話をうかがった。

置所（専用保冷庫）も完備しているため、長期にわたる保管にも対応できる。

法人の事業部には4人のスタッフがいて、遺体の引き取りは株式会社三寶天壽企画に委託するスタイルだ。火葬までは自治体からの扶助費でまかなわれるが、苦慮したのが遺骨の保管場所。そこで、2010（平成22）年に綾瀬市にある民間墓地の一部を購入し、引き取り手のない遺骨を500柱まで預かることができ、合祀墓地を設置したのである。

合祀墓地へのニーズは、予想以上に高かった。神奈川県全域の遺骨の引き取り

に対応していたため、数年でいっぱいとなり、2019（令和元）年には座間市にも独自の合祀墓地を設置することになった。今度は法人が独自で購入した約70坪の土地に霊園をつくり、最大で5000柱まで預かれる体制を確立したのである。霊廟の階段を降りると、その下は骨つぼを並べる棚のある部屋になっている。さらに、床下には深さ3メートル以上の地下室があり、ここに粉状の遺骨が山のように積もっている。毎年2回（6月1日と12月1日）、供養された遺骨が骨つぼから出され、こうして土へと帰っていくのだ。

民間の葬儀社だと、身元確定までに時間がかかった場合は、遺体の保管料（ドライアイス代も含む）が助葬費用に追加請求されることが多いという。しかし足跡の会では、自治体の扶助費の規定内ですべて対応している。そして、埋葬に関しては費用を補助する制度そのものが存在しないので、遺骨の引き取りを嫌がる遺族と交渉しなければならぬ。そのため、ほとんどが低額ないしは無料で預

かっているという状況なのだ。

「無縁遺骨」にならないために大切なこと

助葬事業を行うにあたって最も難しいのが、非営利事業と営利事業のすみ分けだという。特に頭を悩ませるのが、生活保護受給対象ではないものの、経済的にも苦しい人の助葬・埋葬だ。最初は遺族と営利事業（有料）の立場で話をすすめることになるのだが、「どうしても関わりたくない」とかたくなに拒絶され



納骨堂の床下には地下室が掘られていて、供養された骨つぼの遺骨が納められる



合祀墓地である綾瀬 古^{いにしえ}墓地は、民間墓地の中にある

ると、非営利事業の立場に切り替える必要がある。この2つをどう使い分けるかは、スタッフ教育の面でも非常に難しいテーマとなっている。

「遺骨というのは本来、家族が持ち帰って埋葬してあげるべきものです。このまま無縁遺骨が増え続ければ、合祀墓地をいくら増やしても足りなくなってしまう。単身世帯の人が無縁遺骨にならないための終活準備というのも、これからはとても大切な活動になってくるでしょう」と溝渕さんは話す。

そこで足跡の会では、2021（令和3）年から「無縁遺骨」にならないためのセミナー（座間市との相互提案型協働事業）を開催している。元気なうちからしっかりと準備をしておけば、周りに迷惑をかけることはない。特に単身者の場合には認知症になる可能性も含め、早めに見人を決めておくなどの事前準備の必要性を、住民に訴えるのがねらいだ。

その人が生きた足跡を残したい

座間 古^{いにしえ}霊廟の正面には、「この聖地は未来を創造し夢を語り 感奮興起した幾人もの 人生の象徴であり ここに眠る者の 生きた証である」と刻まれている。合祀墓地が身近にあることで、地域住民が少しでも「生と死」について考えるきっかけになることを溝渕さんは願う。

同一法人で助葬事業と保育事業を運営することは、教育的観点からも利点が多いという。子どもたちには「命の大切さ」を教えることができるし、保護者に対しても児童虐待の撲滅を訴える格好の素材



廃棄野菜を肥料にして野菜を育てる「いのちのリサイクル」についても、子どもたちに教えている

となる。「死」について考えるのは、保育の現場でも重要なことなのだ。

「私たちは決して、保育事業と助葬事業だけをやりたいわけではありません。社会にはほかにも、農業分野の後継者不足、障害のある人の就労機会、終末期医療……などさまざまな課題が山積みです。それをしっかりと見つけ、地域の人たちとネットワークを築き、解決へ向けて行動していきたいのです」と溝渕さんは語る。

今後の活動として農業にも取り組む予

社会福祉法人足跡の会

所在地	神奈川県座間市緑ヶ丘2-1-30 Neo Ark Bldg.2-B
電話	046-252-0777
ホームページ	https://www.ashiatonokai.com
事業内容	保育園の運営、生活保護受給者等の葬儀支援、行き場のない遺骨の埋葬事業、学術・文化・芸術・スポーツの振興を図る活動 など

「このまちで生まれてよかった」と 子どもたちが思えるまちづくりをしていきたい

社会福祉法人足跡の会 理事長 溝渕 信一さん

株式会社三寶天壽企画の代表取締役を務めながら、足跡の会を設立して13年余り。溝渕さんのパワーの源は、地域への熱い思いであるようだ。「私はこれまで座間市内で、消防団や青年会議所の活動に積極的に関わり、さまざまな人たちに育ててもらいました。私ひとりの力では、足跡の会の活動を短時間でここまで発展させることはできませんでした。地域の皆さんが協力・支援してくださったことが、とても大きいのです」と語る。

仕事柄、これまでたくさんの「死」と向き合ってきた。日頃から周りに感謝し、自分が死んだ時には、みんなからも「ありがとう」と言われるような生き方をしたいとも語る。特に子どもたちからは、「素敵なまちをつくってくれてありがとう」と思ってもらいたいと考えている。たくさんの子どもたちが「このまちで生まれてよかった」と思えるまちづくりに向けて、溝渕さんの挑戦はこれからも続いていく。



社会福祉法人足跡の会の溝渕理事長

定で、すでに田んぼを購入した。大人と子どもが一緒に作物を育てながら、命の大切さと食べ物について学んでもらう「食育の環^わ計画」という独自のプログラムを作成し、地域住民から参加を募るのだ。さらには障害のある人が働く場づくり、人生の最後を自分らしく終えるための相談所の開設等も視野に入れている。

一人ひとりが生きてきた人生の「足跡」を残すために、生まれてから亡くなるまでの生活サポートをすべてそろえるのが、最終的な目標だ。法人名を「足跡の会」と名づけた由来は、ここにある。「現在、社会福祉法人には地域における公益的な取組が強く求められています。今後私たちにとって大切なのは、ネット

ワークを築くことでしよう。高齢者、児童、障害者とさまざまな福祉テーマがありますが、最終的には誰もがみんな『死』と向き合います。それぞれの得意分野の情報を持ち寄りながら、みんなで一緒にあって地域のために働く——それが私たちに課せられた使命だと思っております」と、溝渕さんは力強く語ってくれた。